

歌磨懺悔

江戸名人伝

邦枝完二

青空文庫

「うツふふ。——で、おめえ、どうしなすった。まさか、うしろを見せたんじやなかるうの」

「ところが師匠ししやう、笑わねえでおくんなせえ。忠臣蔵の師直もろのおじやねえが、あつしやア急に命が惜しくなつて、はばかりへ行くふりをしながら、禪ぜんもしずに逃げ出して来ちまつたんで。……」

「何んだつて。逃げて来たと。——」

「へえ、面目めんぼくねえが、あの体で責められたんじや命が保もたねえような気がしやして。……」

「いい若え者が何て意気地いくじのねえ話なんだ。どんな体で責められたか知らねえが、相手はたかが女じゃねえか。女に負けてのめめ逃げ出して来るなんざ、当時彫師ほりしの名折ンなるぜ」

「ところが師匠、お前さんは相手を見ねえからそんな豪勢な口をききなさるが、さつきもいった通り、女はちようど師匠が前に描かきなすった、あの北国五色墨ほつくごくごしきずみン中の、てつぼうそつくりの体な
んで。……」

「結構じゃねえか。てつぼうなんてものは、こつちから探しに行つたつて、そうざらにあるもんじゃねえ。憂曇華うどんげの、めぐりあつたが百年目、たとえ腰ツ骨が折れたからつて、あとへ引くわけのもんじゃねえや。——この節の若え者は、なんて意気地がねえん

だろうの」

背の高い、従つて少し猫背の、小肥りに肥つた、そのくせどこか神経質らしい歌麿は、黄八丈の袷の袖口を、この腕のところでまで捲り上げると、五十を越した人とは思われない伝法な調子で、縁先に腰を掛けてゐる彫師の亀吉を憐れむように見守つた。

亀吉はまだ、三十には二つ三つ間があるのである。色若衆のような、どちらかといへば、職人向でない花車な体を、

きまり悪そうに縁先に小さくして、驚つかみにした手拭で、やたらに顔の汗を擦つていた。

歌麿は「青楼十二時」この方、版下を彫らせては今古の名人とゆるしていた竹河岸の毛彫安が、森治から出した「蚊帳の男

んじよ

女」を彫つたのを最後に、突然死去して間もなく、亀吉を見出したのであるが、若いに似合わず熱のある仕事振りが意になつて、ついこの秋口、鶴喜つるきから開板かいはんした「美人島田八景」に至るまで、その後の主立おもたつた版下は、殆ど亀吉の鑿さくとう刀まを俟たないものはないくらいであつた。

一 昨年の筆禍ひっか事件以来、人氣が半減したといわれているものの、それでもさすがに歌麿のもとへは各版元からの註文が殺到して、当時売れつ子の豊国とよくにや英山えいざんなどを、遥かに凌駕りようがする羽振りを見せていた。

きようもきようとして、歌麿は起きると間もなく、朝歸りの威勢のいい一九いっくにはいり込まれたのを口開くちあけに京伝きょうでん、菊塙きくくう、それ

に版元の和泉屋市兵衛など、入れ代り立ち代り顔を見せられたところから、近頃また思い出して描き始めた金太郎の下絵をそのままにして、何んということもなくうまくもない酒を、つい付合つて重ねてしまったが、さて飲んだとなると、急に十年も年が若くなったものか、やたらに昔の口説くせつが恋しくてたまらなくなつていた。

そこへ——先客がひと通り立去つた後へ、ひよっこり現れたのが亀吉だった。しかも亀吉から前夜浅草おくやまで買った陰女やまねこに、手もなく敗北したという話の末、その相手が、曾かつて自分が十年ばかり前に描いた「北国五色墨ほつくごくごしきずみ」の女と、寸分の相違もないことまで聞かされては、歌麿は、若い者の意気地なさを託かこつと共に、不

思議に躍る己おのが胸に手をやらずにはいられなかった。

「亀さん」

しばし、じつと膝のあたりを見詰っていた歌麿は、突然目を上げると、引ひツ吊つるように口をゆがませて、亀吉の顔を見つめた。

「へえ。——」

「お前さん今夜ひとつ、おいらを、その陰やまねこ女あに会あわせてくんねえな」

「何んですって、師匠」

亀吉は、この意外な言葉に、三角の眼を菱ひしがた型がたにみはった。

「そう驚くにや当るまい。おいらを、お前さんの買った陰女あに会わせてくれというだけの話じゃねえか」

「冗談じょうだん いっちやいけません。いくら何んだって師匠が陰女な
んぞと。……」

「あツはツは。つまらねえ遠慮はいらねえよ。こつちが何様じゃあるめえし、陰女に会おうがどぶ女郎に会おうが、ちつとだつて、驚くこたアありやしねえ」

「それアそういやそんなもんだが、あんな女と会いなすつたところで、何ひとつ、足たしになりやアしやせんぜ」

「足しになろうがなるめえがいいやな。おいらはただ、お前の敵かたきを討つてやりさえすりや、それだけで本望ほんもうなんだ」

「あつしの敵を討ちなさる。——冗じよ談、冗談いっちやいけません。

昔の師匠ならいざ知らず、いくら達者でも、いまだきあの女を、

師匠がこなすなんてことが。――」

「勝負にやならねえというんだの」

「お気の毒だが、まずなりやすまい」

「亀さん」

歌麿は昂然こうぜんとして居ずまいを正した。

「へえ」

「何んでもいいから石こくちよう町の六つむを聞いたら、もう一度ここへ来てくんねえ。勝負にならねえといわれたんじや歌麿の名折なおれだ。

飽くまでその陰女に会って、お前の敵を討たにやならねえ」

おめえの敵と、口ではいつているものの、歌麿の脳裡のうりからは、

亀吉の影は疾とうに消し飛んで、十年前に、ふとしたことから馴染なじみ

になつたのを縁に、錦にしきえ絵にまで描いて売り出した、どぶ裏の局つ
ぼねじよろう女みようがや郎わかづる 茗荷屋若鶴の、あのはち切れるような素晴らしい肉
 体が、まざまざと力強く浮き出て来て、何か思いがけない幸しあわせ福おほ
 が、今にも眼の前へ現れでもするような嬉しさが、次第に胸を掩おほ
 つて来るのを覚えた。

「師匠、そいつア本当でげすかい」

「念には及ばねえよ」

「これアどうも、飛んだことになつちまつた」

亀吉は、間伸まのびのした自分の顔を、二三度くるくる撫で廻すと、
 多少興味を感じながらも、この降つて湧わいたような結果に、寧むしろ
 当惑の色をまざまざと浮べた。

が、歌麿に取つては、亀吉がどう考えているかなどは、今は少しの屈托くつたくでもないのである。断えず込み上げて来る好色心が、それからそれへと渦うずを巻いて、まだ高々と照り渡っている日の色に、焦慮しょうりよをさえ感じ始めたのであつた。

「で、亀さん」

「へえ」

「女はいつて、え、いくつなんだ」

「二十四だとか、五だとかいっておりやした」

「二十四五か。そいつアおつだの。男には年がねえが、女は何んでも三十までだ。さつきお前さんのいったほつこくごしきずみ北国五色墨の若鶴という女も、ちょうど二十五だったからの、うツふツふ」

歌麿の胸には、若鶴の肌が張り付きでもしているような緊張した快感が大きな波を打っていた。大方おおかた河岸かしから一筋ひとすじに來たの
 であろう。おもてには威勢のいい鰯いわし売うりが、江戸中へ響ひびけとばかり、洗ったような声を振り立てていた。

二

今まで五重塔の九輪くりんに、最後の光を残していた夕陽が、いつの間まにやら消え失せてしまうと、あれほど人の行き來ゆききに賑にぎわつた浅草も、たちまち木この下した闇やみの底気味悪いばかりに陰かげを濃こくして、襟えりを吹く秋風のみが、いたずらに冷ひえ々と肌はだを撫なでて行つた。

燃えるような眸まなざしで、馬道裏うまみちうらの、路地の角かどに在る柳の下したに佇たつたのは、丈せいの高い歌麿と、小男の亀吉だった。亀吉は麻の葉の手拭てぬぐいで、頬ほ冠お冠かぶりをしていた。

「じゃア師匠ししょう、夢にもあつしの知しり合あだなんてことは、いつちアいけやせんぜ。どこまでも笹屋ささやの寅とらに聞いて来た、ということにしておくんなさるなきや。——」

「安心しねえ。お前まへのような弱虫じやくちゆうの名前を出しちや、こつちの辱はじンならア」

「ちえツ、面白くもねえ。もとはといやア、あつしが負けて来たばつかりに、師匠でまくの出席でまくになつたんじゃござんせんか」

「いいから置いときねえ。敵かたきはとつてやる」

「長屋は奥から三軒目ですぜ」

「合が点ってんだ。名前はお近ちか。——」

「おつと師匠、たばこいれ 蓑入たばこいれが落ちやす」

が、歌麿はもう二三歩、路地の溝どぶ板いたを、力強く踏ふんでいた。

亀吉が頬冠りの下から、闇を透すかして見ている中を、まっしぐら

に奥へ消えて行つて歌麿は、やがて、それとおぼしい長屋の前で

足を停とめたが、間もなく内から雨戸をあけたのであろう。ほのか

に差した明あかりの前に、仲まいづる蔵やに似た歌麿の顔が、写うつし絵えのよう

に黄色く浮んだ。

「おや、何か御用ですかえ」

それは正ましく、お近のお袋の声だった。

「ちつとばかり、お近さんに用ありさ。——まア御免よ」

ただそれだけいつて、ちゆうしゆんてい駐春亭の料理のささおり笹折をぶら提げ

た歌麿の姿は、雨戸の中へ、にゆツと消えて行つた。

「いけねえ。師匠はやつぱりな慣れている。——」

ぼうぜん茫然と見守つていた亀吉は、歌麿の姿が吸いこまれたのを見

定めると、しつと嫉妬まじりの舌打を頬冠りの中に残して、もとぎ えんじ元来た縁

よういん生院の土塀どべいの方へ引返した。

中へはいった歌麿は、じよさい如才なく、お袋にみやげもの土産物を渡すが否

や、いっぱしのなしみ馴染でもあるかのように、早くも三畳の間まへ上り

込んでしまつたが、それでもさすがに気が差したのであろう、ふ

ところから手拭を取出して、ひたい額にじんだ汗を拭くと、立つたま

ま小声で訊ねた。

「お近さんは留守かい」

「いやだよ。そんな大きな眼をしてながら、よく御覧なね。その屏風びょうぶの向うに、芋虫いもむしのように寝てるじゃないか」

「芋虫。——うん、こいつア恐れ入った」

なるほど、お袋のいった通り、次の間まの六畳の座敷に、二枚折おりの枕屏風にかこまれて、薩摩焼さつまやきの置物をころがしたように、ずしりと体を横たえたのが、亀吉の謂いう「五色墨」なのであろう。昼間飲んだ酒に肥った己おのが身あまを持って余あましていると見えて、真岡木もうかも綿めんの浴衣ゆかたに、細帯をだらしなく締めたまま西瓜すいかをならべたような乳房もあらわに、ところ狭きまで長々と寝そべっている姿が、歌

麿の目に映じた。

「お近さん」

「え。——」

突然聞き馴れない男の声で呼び起されたお近は、びくツとして歌麿の顔を見つめた。

「よく内にいたの」

「お前さん、誰さ」

「ゆうべおめえに可愛がってもらった、あの亀吉の伯父だ」

「え、あの人の伯父さんだつて」

「そうよ。そんなにびつくりするにや当らねえ。なぜおれの甥を可愛がってくれたと、物言いをつけに来た訳でもなけりや、遊ん

だ銭を返してもらいに来た訳でもねえんだ。おまえに、ちつとばかり頼みがあつて、わざわざちゅうしゅんてい駐春亭の料理まで持つて出かけて来たくれえだからの」

「おや、何んてすいきよう酔狂な人なんだろう。あたしのような者に、頼みがあるなんて。——」

そういいながら、ようやく起き上つたお近はべたりととんびあし脚に坐ると、穴のあくほど歌麿の顔を見守つた。

「おかしいか」

「そうさ。あたしやお前さんが思つてるほど、頼たよりになる女じゃあないからねえ」

「うん、その頼りにならねえところを見込んで頼みに来たんだ。」

——それ、少ねえが、礼は先に出しとくぜ」

親指の爪つまさき先から、弾はじき落すようにして、きーんと畳の上へ投げ出した二分金ぶきんが一枚、擦すれた縁へりの間へ、将棋しょうぎの駒のように突立った。

「おや、それアお前さん、二分じやないか」

お近は手にしていた煙管きせるの雁首がんくびで、なま新らしい二分金を、手許てもとへ搔かきよせたが、多少気味の悪さを感じたのであろう。手には取らないでそのまま金と歌麿の顔とを、四分六分にじつと見つめた。

「どうだの。ひとつ、頼みを聞いちやくれめえか」

「さアね。大籬おおまがきの太夫衆たゆうしゅうがもらうような、こんな御祝儀を

見せられちや、いやだともいえまいじやないか。だがいったい、見ず知らずのお前さんの、頼みというのは何さ。あたしの体で間に合うことならいいが、観音様の坊さんを頼んで、鐘搗堂かねつきどうの鐘かねをおろして借りたいなんぞは、いくら御祝儀をもらつても、滅多めったに承知は出来ないからねえ」

「姐ねえさん、おめえ、なかなか洒落者しやれものだの」

「おだてちやいけないよ」

「おだてやしねえが、観音様の鐘は気に入った。だが、おいらの頼みはそんなじやねえ。観音様の鐘のように大きいおめえの体を、二ふた時ときばかりままにさせてもらいてえのよ」

「あたしの体を。——」

「そうだ。噂うわさに違たがわず素晴らしいその鉄砲乳てつぽうが無むし性に気きに入いつたんだ。年寄だけが不足だろうが、さりとして何も、おめえを抱だいて寝ようというわけじゃねえ。ただおめえが、おいらのいう通りにさえなってくれりや、それでいいんだ。——どうだの、お近きさん。ひとつ、色よい返事をしちやアくれめえか」

ぐつと一ひとひざ膝ひざ乗り出した歌麿の眼は、二十の男のような情熱に燃えて、ともすれば相手の返事も待たずに、その釣鐘型の乳房へ、手を触ふれまじき様子だった。

「ほほほ。改あらたまっていうから、どれほど難むずかしい頼たのみかと思おもったら、いつそ気抜けがしちまったよ。一ふたとき時ときでも三みとき時ときでも、あたしの体たで足たりる用もちなら気きのすむまで、ままにするがいいさ」

「うむ、そんなら、承知してくれるんだな」

「あいさ、承知はするよ。だがお前さん、抱いて寝ようというんでなけりや、どうする気なのさ。まさかあたしのこの乳を、切つて取ろうというんじやあるまいね」

「うふふ、つまらぬえ心配はしなさんな。命に別条べつじょうはありやアしねえ。ただおめえに、そのまま真まツ裸ばだかになつてもらいてえだけさ」

「ええ裸になる。——」

「きまりが悪いか。今更きまりが悪いもなからう。——十年振りで、おまえのような体の女に巡めぐり合つたは天たすの佑たすけ、思う存分、その体を撫で廻しながら、この紙かに描かかしてもらいてえのが、お

いらの頼みだ」

「そんならお前さんは、えかき絵師さんかえ」

「まあそんなものかも知れねえ」

「面白くもない人が飛込んで来たもんだねえ。あたしの体はまくら枕えのお手本にやならないから、いつそ骨折損だよ」

しかし、そういいながらも、ぬつと立上った女は、枕屏風を向うへ押しやると、いきなり細帯をすするすと解といて、歌麿の前に、さつ颯とゆかた浴衣を脱ぬぎすてた。

「さ、速はやくどツからでも勝手に描かいたらどう」

おそらく昼間飲んだ酒の酔よいを、そのまま寝崩れたためであろう。がつくりと根の抜けた島田鬘まげは大きく横ゆがに歪ゆがんで、襟えりあし足あしに乱れ

た毛の下に、ねつとり^{ろくしように}にじんだ脂^{あぶら}汗^{あせ}が、剥^はげかかった白粉を
 緑青色^{まぐろ}に光らせた、その頸筋^{くびすじ}から肩にかけての鮪の背のよ
 うに盛り上った肉を、腹のほうから押し上げて、ぽてりと二つ、
 憎いまで張り切った乳房のふてぶてしさ。しかも胸の山からその
 まま流れて、腰のあたりで一度大きく波を打った肉は、膝への線
 を割合にすんなり見せながら、体にしては小さい足を内輪に茶色
 に焼けた畳表を、やけに踏んでいるのだった。

「どうしたのさ、お前さん、早く描かなきや、行燈^{あんどん}の油^{あぶら}が勿^{もつた}
 体^いないじゃないか」

が、歌麿は腰の矢立を抜き取ったまま、視線を釘^{くぎ}附^{つけ}にされた
 ように、お近の胸のあたりを見つめて動こうともしなかった。

「ちえツ、なんて意氣地がない人なんだろう」

そういつて女が苦笑した刹那せつなだった。入口の雨戸が開いたと思
う間もなく「おや、これは旦那」というお袋の声が聞えたが、す
ぐに頭の上で、追つかぶせるように、「こいつアめずらしい、歌
麿だな」という皮肉な男の声が、いきなり歌麿の耳朵じだを顛ふるわせた。

「あツ。——」

「まあ待ちねえ。逃げるにや及ばねえ」

「へえ。——」

しかし、こう答えた時の歌麿は、もはや入口の闕しきいを跨またいで、路
地の溝どぶ板いたを踏ふんでいた。

「か、駕籠屋かごや。か、茅場町かやばちようだ。——」

跣足はだしの歌麿は、通りがかりの駕籠屋を呼ぶにさえ、満足に声が出なかつた。

三

自分の家の畳の上に坐つて、雇やとい婆ばあの汲くんでくれた水を、茶碗に二杯立続けに飲んでも、歌麿は容易どうきに動悸どうきがおさまらなかつた。

あの顔、あの声、あの足音。——それは如何いかに忘れようとしても、忘れることの出来ない、南町奉行みなみまちぶぎょうの同心どうしん、渡辺金兵衛の姿なのだ。——

「つね。おもての雨戸の心張しんばりを、固くして、誰が来ても、決して開けちやならねえぞ」

「はい」

「酒だ。それから、速く床をひいてくんねえ」

まごまごしている雇婆を急せき立たてて、冷ひやのままの酒を、ぐつと一息あおに呷あおると、歌麿の巨体なまこは海鼠なまこのように夜具の中に縮まってしまった。

「ああいやだ。——」

もう一度、ぶるぶると身を顫ふるわせた歌麿は、何とかして金兵衛の姿を、眼の先から消そうと努つとめた。が、そうすればする程、却かえつてあの鬼のような金兵衛の顔は、まざまざと夜具の中の闇か

ら、歌麿の前に迫るばかりであつた。

「もう二度と、白洲しらすの砂利じやりは踏みふたくねえ」

歌麿は誰たれにいうともなく、拜おがむようにこういつて、掌てを合せた。

その記憶は、五十日の手錠てじょうの刑けいに遭あつた、あの一昨年いっさくねんの一件いっけんに外ほかならなかつた。

つばくろの白い腹はらがひらりとひとつ返かへる度たび毎ごとに、空そらの色いろが澄すみん
 でくる、五月ごがつの半なかばだつた。前夜まへや画会がかいの崩くずれから、京きょう 伝でん、蜀し
 山よくさん、それそれに燕えんじゆう 十じゅうの四人よににんで、深川ふかがわ 仲なかつちよう 町まちの松江まつえで飲のんだ
 酒さけが醒さめ切れず、二日ふたにち酔よの頭痛づうとうが、やたらに頭あたまを重おもくするところ
 から、おつねに附つけさせた迎むかい酒さけの一本いっぽんを、寝ねたままこれから始はじ

めようとしていたあの時、格子の手触りも荒々しく、案内も乞わずに上つて来た家主の治郎兵衛は、齒の根も合わぬまでに、あわてて歌麿の枕許へにじり寄つた。

「これはどうも。——」

歌麿は家主の顔を見ると同時に、唯事でないのを直感したもののそれにしても何んのことやら訳がわからず、重い頭を枕から離すと棒を呑んだように、布団の上に取り直つた。

「大層お早くから、どんな御用で。——」

「歌麿さん」

治郎兵衛は、まず改めて歌麿の名を呼んでから、ごくりと一つ固唾を飲んだ。

「へえ」

「お前さん、お気の毒だが、これから直ぐに、わたしと一緒に
奉行所まで、行ってもらわにやならねえんだが。……」

「奉行所へ」

「うむ」

「何かの証人にでも招よばれますんで。——」

「ところが、そうでないんだ。お前さんのことで、今朝方、自身
番から差さし紙がみが来たんだ」

「え、あつしのことです。——」

歌麿は、治郎兵衛の顔を見詰みめたまま、二の句がつけなかった。
「名主さんや月番の人達も、みんなもう、自身番で待つてなさる。」

どんな御用でお前さんが招ばれるのか、そいつはわたし達にも判
 らないが、お上かみからの呼び出しだとなりやア、どうにも仕方が
 ない。お気の毒だが、早速支度をして、わたしと一緒に行ってお
 くんなさい」

「——」

「外のことと違つて、行きにくいのはお察しするが、どうもこれ
 ばかりは素直に行つてもらわねえじゃア。……」

「へえ。——」

素直に。——それをいま、改めていわれるまでもなかつた。生
 れて五十一年の間、悪所あくしよがよ通いのしたい放題ほうだいはしたし、普なみの道
 楽者の十倍も余計に女の肌はだを知り尽つくして来はしたものの、いまだ、

ただの一度も賽さいの目めを争つたことはなし、まして人様の物を、塵ちりツ端は一本でも盗んだ覚えは、露さらあるわけがなかった。さればこれまで、奉行所はおろか、自身番の土さえまったく踏んだことがなく、わずかに一度、落した大事な葎たばこ入いれを、田町の自身番からの差紙で、取りに來いといわれた時でさえ、病氣と偽つて弟子の秀磨を代りにやつたくらい。好きなどころは吉原で、嫌きらいなところはお役所だといつも口癖くちくせのようにいつていたから察しても、大たいがい概がいその心持は、わかり過ぎるほどわかつている筈だった。その歌磨に、ところもあるうに、町奉行からの差紙は、何んとしても解せない大きな謎なぞであった。歌磨は、夢に夢見る心持こころもちで胸を暗くしながら、家主の指図に従つて、落度のないように支度を

整えると、人に顔を見られるのさえ苦しい思いで、まず自身番まで出向いて行つた。

自身番には、治郎兵衛のいつた通り、名主の幸右衛門と、その他月番の三人が、暗い顔を寄せ合つて待つていた。幸右衛門は、歌麿の顔を見ると、慰めるように声をかけた。

「飛んだことでお気の毒だが、これア、何かお上の間違かみいに違かいあるまい。お前さんのようなお人が仮かりにもお奉行所へ呼び出されるなんてことは、ほんとの災難だ。——だが心配は無用にさつしやい。天に眼あり。決して正直な者が罪に陥おちるようなことはありやアしねえからのう」

口の先では強いことをいつているものの、町役人達も、さすが

に肚はらの中の不安は隠せなかつたのであろう。同心渡辺金兵衛の迎いが、一刻でも遅いようにと、ひそかに祈る心は誰しも同じことであつた。

しかも五月の空は拭ぬぐつた如く藍色に晴れ、微風は子燕の羽をそよそよと撫なでていたが、歌麿の心は北国空のように、重く曇つたまま晴れなかつた。

四

それは正に、夢想むそうもしない罪科であつた。

両国広小路の地本問屋じほんどんや加賀屋吉右衛門から頼まれて大阪の絵師

石田玉山が筆に成る（絵本太閤記）と同一趣向の絵を描いた、その図の二三が災わざわいして、吟味ぎんみちゆうじゆうろう中入牢おおせつく仰付おほせつくといひ渡された時には歌麿は余りのことに、危あやうく白洲しらすへ卒倒そつとうしようとしたくらいだった。

死んだような気持で送った牢内の三日間は、娑婆しゃばの三年よりも永かった。——その三日の間に歌麿は、げつそり頬のこけたのを覚えた。

「これからは怖こわくて、絵筆が持てなくなりやした」

出牢後、五十日間の手錠てじよう、家主預けときまつて、再び己が画室に坐つた歌麿は、これまでとは別人のように弱気になつて、見舞に來た版元はんもとの誰彼つかを捕まえては、同じように牢内の恐ろしさを

聞かせていたが、そのせいか「八十までは女と寝る」と豪語して
 いた、きのうまでの元氣はどこへやら、今は急に、十年も年を取
 ったかと疑われるまでに、身心共に衰えて、一杯の酒さえ目にす
 ることなく、自ら進んで絵の具を解とこうなどという、そうした気
 配は、薬にしたくも見られなかった。

しとしとと雨の降る、午ひるさが下りだった。歌麿はいつものように
 机にもたれて茫然と、一坪の庭の紫陽花あじさいに注そそぐ、雨の脚あしを見詰
 めていた。と、あわててはいつて来たおつねが、来客を知らせて来
 た。

「どなただか知らねえが、初めての方なら、病氣だといって、お
 断りしねえ」

「ですがお師匠さん、お客様は割下水のお旗本、阪上主水様からの、急なお使いだとおっしゃいますよ」

「なに、お旗本のお使いだ」と

「そうでござんすよ。是非ともお目に掛つて、お願いしたいことがあるとおっしゃつて。……」

「どういふ御用か知らねえが、お旗本のお使いならなおのこと、こんな態じやお目に掛れねえ。——御無礼でござんすが、ふせつておりますからと申上げて、お断りしねえ」

歌麿の、この言葉が終るか終らないうちであつた。「お師匠さん、その御遠慮には及びませんよ」といいながら、庭先の枝折戸を開けて、つかつかとはいつて来たのは、大丸髭まるまげに結いつた二十

七八の水も垂れるような美女であつた。

「これアどうも、こんなところへ。……」

あわてる歌麿を、女は手早く押し止めた。

「あたしでござんす。おきたでござんす」

「え。——」

鋭く、窪くぼんだ眼を上げた歌麿は、その大丸鬚が、まがう方なく、嘗かつては江戸随一の美女と謳うたわれた灘波屋なになわのおきただと知ると、さすがに寂しい微笑を頬に浮べた。

「おお、おきたさんか。——ここへ何しに来なすつた」

「何しにはお情なさけない。お見舞なまこに伺つたのでござんす」

迂すべるように、歌麿の傍そばへ坐つたおきたは、如何にもじれつたそ

うに、衰えた歌麿の顔を見守った。——二十の頃から、珠たまのよう
 だといわれたその肌は、年増としまじか盛りの愈 《いよいよ》冴さえて、
 わけてもお旗本の側室そくしつとなつた身は、どこか昔と違ふ、お屋敷
 風の品なまさえ備そなわつて、恰あたかも菊きく之丞のじようの濡衣ぬれぎぬを見るような凄せい艶えん
 さが溢あふれていた。

が、歌麿の微笑は冷たかつた。

「お旗本のお使いと聞いたから、滅多めったに粗相そそうがあつちやならねえ
 と思つて断ことわらせたんだが、なぜまともに、おきただといいなさら
 ねえんだ」

「そういつたら、お師匠さんは、会つてはおくんなさいますまい。
 ——永い間の御親切むを無むにして仇むし男と、甲州くんだりまで逃げ

出した拳句、江戸へ戻れば、阪上様のお屋敷奉公。さぞ憎い奴だと思し召したでござんしよう。——ですがお師匠さん。おきたの心は、やっぱり昔のままでござんす。ふとしたことから、お前さんの今度の災難を聞きつけましたが、そうと聞いては矢も楯も堪らず、お目に掛れる身でないのを知りながら、お面めんを被かぶつてお訪ねしました。——ほんに飛んだ御難儀、お腰などおさすりしたい心でござんす」

黙つて眼を閉じていた歌麿は、そういつてにじり寄つたおきたの手の温ぬくみを膝ひざもと許もとに感じた。

「いや、折角せっかくの志しのだが、それには及ばねえ。今更お前さんに擦さすつてもらつたところで、ひびのはいったおれの体は、どうにも

なりようがあるめえからの」

きのうまでの歌麿だったら、百に一つも、おきたの言葉を拒むこぼわけはなかったであろう。まして七八年前までは、若い者が呆れあきるまでに、命までもと打込んでいた、当の相手のおきたではないか。向うからいわれるまでもなく、直ぐさま己おのが膝下へ引寄せずにはおかない筈なのだが、しかし手錠てじょうの中に細った歌麿の手首は、じつと組まれたまま動こうとしなかった。

「お師匠さん」

「――」

「お前さんは、殿様のお世話になつてゐるあたしが、怖こわくおなりでござんすか」

「そうかも知れねえ。おれアもうお侍と聞くと眼の前が真暗になるような気がする」

「おほほほ、弱いことをおっしやるじゃござんせんか。そのような楽な手錠なら、はめていないも同じこと、あたしが外はずして上げましょうから、いつそさっぱりと。……」

おきたは如何にも無造作に、歌麿の手錠に手をかけた。

「あ、いけねえ」

「そんな野暮やぼな遠慮は、江戸じや流行はやりませんよ」

ぐいと手錠を逆に引張った刹那せつな、歌麿は右の手首に、刺すような疼痛とうつうを感じたが、忽ち黒い血潮がたらたらと青畳を染めた。

「あッ」

さすがにおきたは、驚いて手を放した。

「飛んだことをしてしまいました。——」

手速く、帯の間から取出したふところ紙は、血のにじんだ歌麿の手首に絡からみついていた。

「お痛うござんすか」

「——」

「何かお薬でも。……」

が、歌麿はうつむいたまま、一言も発しなかった。おもてを流して通る簾すだれ売うりの音が、高く低く聞こえていた。

「師匠」

「えッ」

その声に、ぎよつとして面おもてを上げた歌麿の、くぼんだ眼うつつに映つたのは、庭先に佇たたずんだ、同心渡辺金兵衛の姿であつた。

五

この後、金兵衛の姿は、常に魔の如く、歌麿の脳裡のうりにこびりついて、寸時も消えることがなかつた。

その金兵衛に、ところもあるうに、初めて訪ねた陰女やまねこの家で会つたのだつた。跣足はだしのまま逃げた歌麿が、駕籠屋を呼ぶにさえ、満足に口がきけなかつたのも、無理ではなかつた。

「師匠」

昨夜の様子を、一刻も速く聞きたかつたのであろう。まだ六つが鳴つて間もないというのに彫師の亀吉は、にやにや笑いながら、画室の障子に手をかけた。

「師匠。——おや、こいつアいけねえ。ゆうべのお疲れでまだ夢の最さいちゆう中でげすね」

ふところから、吠かますと鉞なた豆煙管たまめぎせるを取出した亀吉は、もう一度にやりと笑うと、おつねの出してくれた煙草盆で二三服立続けにすぱりすぱりとやっていたが、頭から夜具やぐを被かぶつた歌麿が、小揺こゆるぎもしないのにいささか拍子ひょうしぬ抜けがしたのであろう。しばし口の中で、何かぶつぶつつぶや呟くと、立って、勝手許かたてにいるおつね婆おばのほうへ出かけて行つた。

「おつねさん。師匠はまだ、なかなか起きそうにもねえから、あつしや一寸並木まで、用達ようたしに行つて来るぜ」

「亀さんにも似合わない、お師匠さんが、こんなに早くお起きなさらないのは、知れきつてるじゃないか」

「知つちやアいるが、今朝けさばかりは、別だろうと思つてよ」

「そんなことがあるものかね。大きな声じやいえないが、ゆうべは何か変つたことでもあつたと見えて、夢中かけこで駈込んでくると、そのままあたしに床とこを取らせて寝ておしまいなんだもの。そう早く起きなさるわけはありやしないよ」

「ふん、だからよ。だからその変つたことはいきさつを、ゆつくり師匠に訊ききてえんだ。——まあいいや。半時ばかりで帰つて来

るから、よろしくいっつといてくんねえ」

亀吉の足音が、裏木戸の外へ消えてしまうと、怯おびえた子供のよ
うに、歌麿は夜具の襟えりから顔を出して、あかりを見廻した。

「びっくりさせやがる。こんな早く来やがって。——」

のこのこと床から這はい出した歌麿は、手近の袋戸棚を開あけると、
そこから、寛かんせい政六年に出版した「北国五色墨ほつくごくごしきずみ」の一枚を抜き
出した。それはゆうべ会った陰やまねこ女のお近と寸分も違わない、茗み
荷ようが屋わかづる若鶴の姿だった。

「うむ、ひよつとするとこれやア姉きょうだい妹まいかも知れねえ。——だ
が、あいつの肌かわに、まともに触さわる間まもねえうちに、篋べらぼう棒ぼうな、あ
んな野郎やろうが、あすこへ現れるなんて。——」

歌麿はそういういながら、手にした錦絵を枕許へ置こうとした。と、その瞬間、急に手先の痺しびれるのを感じた。

「こ、こいつア、いけねえ。——」

しかし、その語尾は、もはや舌が剛張こわばつて、思うようにいえなかつた。

「お、つ、ね。——」

裏返しにされた亀の子のように、歌麿の巨軀きよくは、床の上でじたばたするばかりだった。

「大変ですよ。お師匠さんが大変ですよ」

おつねが、耳の遠い秀麿を、声限りに呼んでいるのを、歌麿は夢のように聞いていた。

文化三年九月二十日の、鏡のような秋風が、江戸の大路おおじを流れ
ていた。

青空文庫情報

底本：「歴史小説名作館⁸ 泰平にそむく」講談社

1992（平成4）年7月20日第1刷発行

初出：「面白倶楽部」光文社

1948（昭和23）年4月号

入力：大野晋

校正：noriko saito

2008年10月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

歌麿懺悔

江戸名人伝

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫
著者 邦枝完二
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>